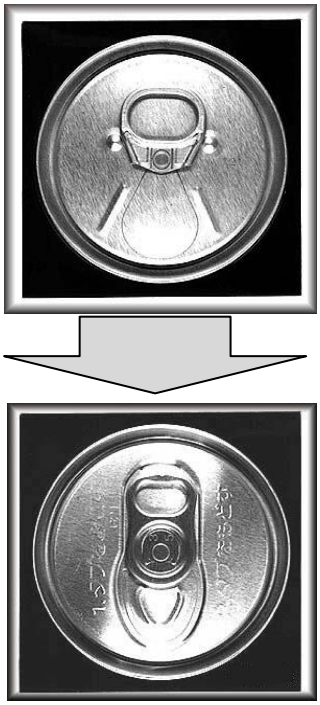
環境重視のマーケティング

～ 飲料缶とプルタブの歴史 ～

ジュースなどの飲料の容器を缶にして一般に販売することが始まったのは、国内では1957年のことでした。それまでは、缶の材料である金属が中身の果汁等と相互に及ぼす悪影響のため、ジュース類は瓶で販売されるのがあたりまえだったのです。その後、缶や内容物の加工技術の進歩によって、缶入り飲料が普及するようになりました。

もっとも、当時の缶詰は缶切りにより缶を開けるものでした。そのため、ジュースでは小穴を開けるための小さな金具(オープナー：今でも同型のものが缶切りやツールナイフに付属していることがある)が添付されていました。ジュースが出る穴と空気穴との2つを開けることがどうして必要なのかは、小学校における理科の実験テーマにもなっていました。

オープナーなしに開缶できる工夫はアメリカで実用化され、1965 年には日本でも生産されはじめました。1983 年には国産缶飲料の全てがこの方式(Easy Open End)になりましたが、これは指掛けのリングを強く引いて口金の一部を切り取るプルタブ(pulltab) 方式でした。缶のフタ部分の材料はアルミニウムが用いられていましたが、これは自然状態で酸化・還元されないため、地上に散乱したプルタブが、いわゆる「土に還る」ことはあり得ませんでした。この点が鉄を主原料とするスチール缶と大きく異なるところです。また、ほとんどのプルタブは缶とは別に捨てられ、それを動物が摂取し、消化管を損傷し死に至るという被害を及ぼしていることが判明しました。アメリカの州によってはこのプルタブが禁止され、新たに開発されたタブが缶本体から外れないステイオンタブ(Stay-onTab) 方式に代わりました。



1982 年にこれを持ち帰って日本に紹介した団体があり、缶・飲料メーカーへの働きかけによって、1990 年には各社揃ってステイオンタブ方式へ移行するようになりました。

資料番号：1-19-1	出所：菅井直也 http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/bitstream/harp/8447/1/fukushi8(Sugai).pdf 日本製缶協会　http://www.seikan-kyoukai.jp/history/06.html 環公害防止連絡協議会　http://www4.kcn.ne.jp/~yanoya/huta.html